

はなし



慶応大大学院教授 蟹江 憲史さん

(6月16日、札幌市北区で開かれた『持続可能な地域づくりシンポジウム

世界が憧れる札幌を目指して』より)

貧困、格差…課題を関連づけ国連「開発目標」達成を

全での国連加盟国が2015年に合意した「持続可能な開発目標(SDGs)」をこ存じますか。30年に向けた課題解決の国際基準で、日本でも関心が高まっています。

目標数は全部で17。「貧困をなくそう」「全ての人に健康と福祉を」「働きがいも経済成長も」「住み続けられるまちづくりを」といった具合です。全て普遍的な内容で、国はもちろん自治体や企業などの、あらゆる活動に関連づけることができます。

各目標には計169のターゲットが関連づけられています。「貧困をなくそう」の下には「30年までに各国の定義に従って貧困状態にある人の割合を少なくとも半減させる」とあります。途上国だけの話ではなく、日本にも当てはまる問題なんですね。

法的拘束力やペナルティはありませぬ。野心的なゴールを掲げつつも、実施メカニズムは各主体に委ね、国連は各国の進捗状況を把握し、評価するだけです。国同士が折衝し、できることを積み上げる国際条約とは対照的です。

経済、社会の問題を包括する形でまとめられました。

01年に途上国向けにつくった「ミレニアム開発目標」を前身に、グローバルな環境、多様な課題を包括した理由に「地球システムの限界」という意識の共有があります。

長年「経済成長と繁栄は良いことだ」と言われてきました。二酸化炭素の排出量が急増し、多くの熱帯雨林が失われるなど成長の反動は深刻です。

必要ですが、うまく進めれば、持続可能な社会を実現できる。羊つる式にできるのが「おいしい」わけです。縦割りを乗り越え、問題を融合して解決する。SDGsはチャンス

既に欧州はノルウェーやドイツなどで政府の政策策定や予算編成でSDGsを生かす動きが相次いでいます。中国は五カ年計画の年次評価とSDGsと同期させる予定です。日本も政府の推進本部が立ち上がりましたから、国際的な遅れが指摘される貧困やジェンダー問題で、どう対処するか正念場になります。

SDGsのターゲットの一つ「食糧廃棄物を半減させる」を例に具体的に考えてみましょう。捨てる食べ物が減れば、魚などの天然資源の有効活用が促されます。水資源の利用効率も上がるし、食糧供給に余裕ができれば、飢餓や栄養失調の撲滅も望める。調整は

す。企業での活用も広がります。SDGsは海外で通用する指標ですし、専門や所属にかかわらず連携しやすい便利なツールになります。

グローバルで長期的対処が求められる課題と地域の取り組みを結びつける機能もある。地域では優先して達成すべき目標を見定めて、他の目標との整合性を取ればいい。

いったん行動が始まると進捗状況を評価することが大事です。そうすれば「日本はこの位置にいるし、自分たちは今、このくらいの段階にいる」と分かるわけです。



かにえ・のりちか 1969年、東京都出身。慶応大大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士(政策・メディア)。東京工業大学准教授などを経て、2015年から現職。政府の「持続可能な開発目標(SDGs)推進円卓会議」委員も務める。48歳。

北海道では札幌市が「持続可能な都市」の視点を盛り込んだ第2次環境基本計画づくりを進めており、渡島管内八雲町、上川管内下川町がSDGsをつまぐ使って、まちづくりを生かそうとしています。

地域も経済振興を求めています。SDGsも経済成長を見据えた戦略。そのための大前提として環境を良くし、社会問題も解決しているというアプローチと言えます。SDGsからどんなチャンスを読み取るかの競争が、これから世界中で始まりま

(構成・十亀敬介)

道央ワイド